

真 生

第五卷 十一月號

○宗教には部分としての吾人が全部としての如來に南無するの方面と、この南無したる人々が其の心を以て社會に對する生活の方面とがある。即ち入信門と體現門との二つである。

○乍然この二は本來二つの者ではない。入信は體現を理想として始めて入信の意義をなし、體現は入信を待つて始めて其の要求を實現することが出来るからである。

○然に世の宗教家と云はれる人々の間にはともすれば此の二面を閑却して、反つて兩者相反するかの觀さへあるがこれは未だ此の關係を知らぬ爲めである。

○如來に南無する方面がなくて、どうして理想實現の方面があり得やう。眞實の理想は如來に南無することによつてのみ始めて實現することが出来るからである。

○それと共に、又眞實の入信も理想實現の要求なくしては決してあり得ないものである。それは理想實現の要求なくしては眞實の如來には南無することができないからである。

○従つて此の二つの方面は如來を中心とする宗教生活の二方面である。一は如來への入信であり、一は如來からの體現である。

○念佛と生活との關係も亦この二面を離れては一切が意味を爲し得ない。何の爲めの念佛ぞや、そこには自づからなる此の宗教の二面があるのである。(念)

信仰の綱領

- 一、我等は永遠の生命と無限の向上とを要求す、この要求に應ずるものが宗教なり。永遠の生命とは不滅の自覺なり。無限の向上とは人格の完成、價値の生活なり。
- 二、我等は無限の時間と空間とを超越せる宇宙唯一の主體なる道と愛との獨尊を信奉す。道は宇宙の大道、天地の法則、萬物秩序の原理にして愛は人格の中心、慈悲の源、萬法歸一の根源なり。この主體を名づけて如來とす。如來は吾人の本尊なり。
- 三、如來は絶對の慈悲にして、衆生は絶體の歸依者なり。この歸依の姿が即念佛なり、生佛不二なり。神人合一、天地一體の妙諦なり。
- 四、此の妙諦より出づるもの、是ぞ永遠の生命にして、又これぞ無限の向上價値の生活、人格の完成なり。至心に念佛する者は自づから斯の妙境に到達す。人生の意義要するに斯の妙境の體現に外ならず。

目次

◆信仰の綱領	
◆宗教生活の二方面	土屋觀道
◆偶感一つ二つ	全上
◆吾が朋友便り	
◆供養行	中野善英
◆風揚げ	全上

宗教生活の二方面(一)

土屋觀道

一、自力門と他力門

靜に宗教生活を反省して見ますればそこには二つの方面があるやうであります。其の一は未だ信仰の道には入らない人々が、自ら解脱の理想地を求めて、之に入りたいとして進む所の方面と、一は已に其の道を發見し、其の道に入つて、自ら此の道を實現しやう、體現しやうとする、即ち理想實現に努力してゐる人々の生活であります。然に其の考へによれば此の二者は本來二つのものではなく、それは私共の信仰生活に於ける二面であり、又一に信仰の發達階程であるに過ぎぬと思ひますが、多くの社會者は宗教信仰の既成宗教の上には此の二つの流れが相入れぬかに見ゆる形で現はれてゐるのを見るのであります。

而て其の最も著しい傾向を示してゐるものは聖道門と淨土門との間に此の傾を大ならしめ、自力門と他力門と云ふ言葉に於て殊に其の色彩を強からしめてゐるやうであります。

今其の一例を擧ぐれば、從來の淨土教殊に眞宗一派の流れの如き、全く自己の無力を表旁して、全々自己の理想などあり得ぬものかと思はしめ、又全々其の理想など實現しやうと思ふことは其の宗にさへ反するものかの如く説いて、そのまゝ如來の大慈悲を受けて之に信賴し、之に打任かせて、如來に全部を放擲するの信仰である。従つてその意味に於ける如來への信仰の外、一切自己そのもの、理想實現など自分自身に起さうとするのは反て自力我慢の沙汰として之を否定さへするのである。然に之に反して所謂聖道門の人々は之等の方面を反つて否定して、全部の力を自己の理想の上に實現せんとするの理

想であり、要求であつて、自己の是とする眞實の理想を直に自己の生活の上に實現しやうとするのである。更に之を言換へれば前者は如來に南無し、如來に信賴して、如來の本願にすがり、如來の御救いによつて、一切を解脱しやうとの信仰であり、後者は如來を信じ如來に歸依すると云ふことに於ては前者と異なる所はないとしても、それはたゞ、吾人の先覺者として、吾人の道の指導者としての先師に過ぎぬのであつて、其の理想と其の理想の實現とはあくまで自己自身の實力によつて之を實現しやうとするの傾きである。従て前者は現在の自己の非理想的境地を厭い捨て、如來の淨土、如來の境地に如來の御力に救はれて、往かうとし、後者は自己現在の非理想地を、自己の理想の如く此の土に於て之を改造し、改善して、諸佛と等しき自己の佛國を自己の力で建設しやうとするの傾きである。故に前者は自己の力を實現すると云ふよりも此の力を寧ろ不可として放擲して如來の御救いを中心とし、後者は如來の救いと云ふやうな他力の考へを放擲して、自己内心の力を以て一切を脱却しやうとするの傾向である。

二、二者の交渉

乍然此の二つの傾向は單に聖道淨土の二門に限らず、同じ聖道門に於ても亦自ら此の二つの傾きを生じ、同じ淨土門の中にも亦此の二つの傾向を各に以てゐるやうである。即ち同じ聖道門自力門と云ふ中にも禪宗は主として絶對主觀の上に自己即佛としての自力の宗教とならうとし、眞言宗の三密加持の成佛の如き、或は日蓮一派の稱題成佛の如き、或は大日如來により、或は本門の釋迦牟尼佛によるの相違こそあれ、之を禪宗に批ふれば、正しく如來の他力を仰ぐ他力教と全く違はないやうな感じさへもあり。又同じ淨土教他力教と云ふ中にも、眞宗一派の信心本位と淨土宗一派の稱名本位との二つを批ふれば一見、前者が全々自己の無力を主張し、如來の絶對他力を主張するに、後者が如來の絶對を否定して、本願に乗ずる稱名の念佛を力説しやうとするが如きは全く相反したやうな傾きさへ見ることができるのである。斯くの如く同じ自力門と云ふ中に他力方面の傾向多きものと、他力門と云ふ中に反つて自力方

面の傾向の多きものとの二つがあることを見るとき此の二は、彼の絶對自力門としての禪宗と、絶對他力門としての眞宗とを外にして、更に相似たるものがあること云はねばならぬ。

乍然こゝに絶對自力門と云い、絶對他力門と云ふが果して世にさうした絶對の自力とか他力とか云ふものがありうるであらうか、若し在りうるとするならばどういふ意味に於てありうるか、若し在り得ぬとするならばどういふ意味に於て在り得ぬか、私共は先づ此の言葉の意味から嚴定して、更に論歩を進めなければならぬ。今絶對の自力と云ふ立場から考へて絶對自力の宗教と云ふが、如何に絶對の自力教と云つても、全々自分を指導して戴く先覺の教にも依らず、又不立文字として、全々佛陀の經典にもよらぬものとするならば何を以て自己の信ずる宗教を自ら佛教と云ふことができるであらう。現に又如何に自力宗と云ふからとて、今日の佛典にも全々依らず、又先師の導きにも關係せずと云ふならばそれこそ佛教と云ふこともなくなるのであるが、現に如何なる自力宗と云つても夫等の力まで全々いらぬと云ふのではないではない。殊に禪宗の人々の多くが觀音菩薩を禮拜し、若は之に向つて其の加被力を念じ、若は觀音經等を誦持するが如き、之等の力までも全々否定しない限り、之をしも寸毫の他力なしと云ふことができるであらうか。然ばかゝる意味での絶對自力ならば例令禪宗と雖も夫はあり得ぬことであるが、やはり以上の諸點に對しては自力宗を表とする宗旨にも他力の助けがなくてはならぬこと、いはねばならぬ。まして自我を否定して、無我を説き、常住を否定して無常を主張する佛教に於て、一切は無常であり、無我であり、因縁生であり、依他起性である吾人に自力などと云ふ言葉さへ嚴密意味に於てはないのが當然であるのにまして、自力宗などと主張する自力の宗旨があらう理はないのであつて、一切は自然のまゝに、自我を放擲して大自然の御力に一切を生きることが寧ろ禪の禪たる所ではあるまいか。然は絶對他力を表す眞宗の立場は如何であるか、一切を如來の御力とし、一切を如來に任かすと云つても、頭に火がつけば熱くて之を自ら取らうとし、溝一つ飛び越えるにも自分の力で越せるだけ

は自ら努力して之を越えやうとすることは決してそれをしも自分の力を出してはならぬとは云ふまい。自ら千里の道も走せて之を聞き、火中の中をも過つて之を聞くべしとの如來の勵語はそこに聽聞の努力までも如來に任かせて起さぬでもよいと云ふものではない。して見れば如何に絶對の他力と雖も、決して自己の努力のあるものまでも悉く否定して、向との一心までも起さしめないとすることはあまりに自力の絶對否定と云はねばならぬ。まして、自ら之を信ずるが如き自ら信ぜんとして信ぜらるべきものではなく、信ぜまいとして信ぜずにはゐられぬと云ふ點にまで到ればそれを以つて、如來の信ぜしめ給ふ所である之を如來の御力によるものと他力に見るのも亦一理あることではあるが、それにしても、それがそのまゝ、さうした意味に於ける自己の信念であり、又自己の信念の力であつて、それを自己の信念の力でないとは云へぬであらう。まして、此の二者を公平な立場から考察すれば如何に法力、佛力の然らしむるところと云つても之を法力、佛力のみで担任させて、吾人が之に對する研究も努力も精選もいらぬとするならば何によつて吾人は眞に向上し發展し、又進歩發達をなして行くことができるのであるか、所謂それでは佛敎の自然外道と云はれるものとなつて、眞の佛説ではないことになるのであらうかといつてそこに常住の佛説も認めず、またそこに如來の佛力法力も認めずして、たゞ獨り道を求めて行くことは實に永劫の一人旅になるのであつて、佛と共にある温情の世界を全く没却した所の淋しい世界と云はねばならぬのみならず、如來の大なる慈悲をも全く無視したものと云はねばなるまい。然は以上の意味に於て、世に絶對の自力敎も他力敎もあり得ないと云ふことになるのである。

三、正しい意味での自力と他力

然は從來云ふ所の自力敎と他力敎とは本來この世には存在しないと云ふことになるかと云ふに、それは偏に私共の宗敎に對する見解の相違に過ぎぬ。従て、自力敎と云ふのは必ずしも以上のやうな意味での如來の他力を否定するものではない。乍然その主とする所は例令如來の加被力若は先覺の指導をよし

待つとするも要するにそれは自己本來の面目を明にして、自己自身に於ける本具自性を開顯して自ら佛としての生活を此の土に建設しやうとする點に於て之を自力の敎と云ふのであつて、要は自己中心の向上努力の場合にあると云ふべきである。然に他力敎の方面では自らの力で此の理想を實現することができないので主として如來の御力により、殊に如來の他力本願の誓いを信じて之によつて、先づ如來の淨土に往生し、而てのち、如來の説法度生の他力によつて佛とならうとするにある。言換へれば自力門の方は同じ如來の御方を受けるとするも、それは如來の本願に乗ずると云ふのもなく、又如來の淨土に往生すると云ふのもなく、要は自己の力で自己の煩惱を打破してあくまで自らの佛土を建設しやうとするに反し、他力門の方では自らの努力も獨力ではできぬと云ふ考へのもとに、如來の本願にすがり、如來の救いによつて、己があさましき穢國の土を離れて如來の淨土に往生することによつて佛とならうとするにある。此點主として、自力他力の問題は如來の本願によつて救はれるか、自己の力によつて解脱するか、此の二つの問題は其の自力門たる他力門たるを問はず、各々寸毫の自力を要せぬと云ふ他力もあり得ず。又他力を要せぬ自力もあり得ず、因縁因果の關係より云へば因をそのまゝとして縁に重きを置けば其の果に對して縁は絶對の他力となり、縁をそのまゝとして、因に重きをおくときに其の因は果に對して絶對の自力として現はれて來るのであつて、因縁和合を外にして其の果を見るのができぬとするならば、一つの果に對して因をのみ重きにおくのも誤りであり、縁にのみ重きをおくのも誤りと云はねばならぬ。かと云つて、因と縁とを同等に見るからと云つて、因を半分、縁を半分と云ふやうに見て半自力半他力とも見るべきであらうか。之を表にして見易いやうにするならば一應、

一、絶對自力——全々他力を否定するもの

二、絶對他力——全々自力を否定するもの

三、半自力半他力——自力と他力との和合と見るもの

と云ふ事にもならう。乍然之を嚴密に見るならば因縁和合の結果としての解脱宗教を見る上にも又自ら因に重きをおくのと、縁に重きを置くのによつて、又そこに自力教と他力教とがありうる。此の點からすれば

一、自力の中の他力教——日蓮宗の如き

の如き二つの宗教があり得るのであります。従て一般普通の人から之を見ますれば自力的主張の甚だ強烈なものか、はらず、日蓮宗の如きは其の本尊佛に信賴し歸命し題目を稱すること尤で絶對他力教かの感さへするのである。之に反して淨土宗の如き全く他力教であり乍ら、稱名の自行を勵むと云ふ點に於て、ともすれば如來を忘れ、淨土を忘れ、念佛申すことへのみ力を入れて、而もそれが稱名をそのまゝ、自己の力にて修する自己の自力の行であるとする爲めに恰も眞宗あたりからは他力の方面が見えずして、自力念佛少くとも半自力半他力と云ふ風に云はれるものである。但しこゝに半自力半他力と云ふのは必ずしも半半の意味ではなく、自力を中心として助縁をかるものと、助縁を絶大として自力を軽く見るとによつて以上の相違が生じて來る理けである。

四、二者の相融

乍然以上の自力門と他力門とに於て、私共のとるべき眞實の宗教は何れを中心とすべきであるか靜に其の依て來たる所を反省し、自ら其の中に於て歸すべき中心を明にすると云ふことは吾人の宗教生活に於て最も大切なることである。従て私は主として此の自力他力の二門に就て可なり其の分別に苦しんだ一人である。何となれば私共の心に映ずる各宗の祖師たちの言行は各々其の宗の特長ある人格の光輝を放つてゐるところからして、一を捨て一を探ると云ふことができないからである。而もそこには一得一失あるを免れず、自力門の特長とすところが他力門に缺け、他力門の特長とするものが自力門に無く、

又自力門に缺げたりと思ふところが他力門にあり、自力門に缺げたりと思ふところが他力門に充分に充たされてゐるなどを其の教義と祖師の人格の中に見ることのできるとき、私共は其の各々の中に何を是とし、何を非とすべきかを見ることができないからである。而も亦更に一步を進めて其の宗を眺め來たるべき一宗の宗たるものは萬宗の宗たるものがあるではないか、即ち一宗の中に各々、各宗の特長のすべてを抱擁し、更に其の一切に超勝せるものが各々にあるやにさへ見ることができないかと思ふとき、吾人はこゝに於て自ら各宗の各宗たる所以を尊重して、又自らそこに自らの立つべき一宗を尊重し得るものではないかとさへ考へざるを得ないものがある。それは恰も、昔の如き封建的見解を捨て、人類の平等の上に立つて、各人の人格を各々尊重して、而も自らの人格の尊嚴を尊重することができざるやうなものが如きものである。乍然かく云へばとて、吾人は各宗を打て一丸となし、何にもかも直に一切が平等であり、一切が一であると云ふものではない、そこには各々の得失も明に之を認め、又其の説の淺深廣狹より、將來に於ける人類の進歩に對して如何なる宗教が今後の宗教たるべきものかを考察してゐないことはない。否寧ろそこまで考察し得たる上に於て吾人は以上の各宗の得失を之によつて見ることができると云ふべきである。

従て上述の如き自力他力の二方面が吾人の宗教生活に現はれて來たと云ふのは吾人の宗教生活に此の二方面の生活が必要であつたからではないか、そして又、それにもかゝらず一方は絶對自力的にならうとし、又一方は絶對他力的にならうとするのも之また吾人の生活の中にかうした傾きを生じやすき點があるからではないか、そして又、その間半自力半他力とか、或は自力の中の他力となり、他力の中の自力とか、自力の中の自力とか、他力の中の他力とか云ふが如きの信仰が同じ宗教と云ふ中に現はれて來たと云ふことも之を其の時代に照し、又其の人の人心の正反合の道理に合せて考へ來るとき何れも或る

點までは無理ならぬ所の道理と歴史の事實がある。私ばいつか此の理由と歴史の事實とを詳述して見た
 と思つてゐるが今は其の時間を有たないから、其の理由の大略だけに止めておかうと思ふ。

(イ) 自力の中の他力、此の宗の見方は一切を自己の中に見、一切を自己そのものゝ發展であり、生
 長であるとして見るの見方であつて、如來の爲めや、神の爲めの人生でなく、人生の爲めの如來であり、
 神であるとの見方である。而も自分自身の中の眞我を中心として、一切があり、一切が見られるのであ
 つて、一切の善惡美醜悉く自己を中心としなないものはない。又その自己そのものとしての自性こそは本
 然本具の佛性であつて、此の他に佛もなければ神もない、此の自性即ち神であり佛である。故に此の自
 性そのまゝが即ち神であり佛であるのであるから、宗教の本質は要するに此のものゝ生長であり發展で
 ある。従て吾人の生活は此の外に何ものも求むる必要はないのである。従て吾人はたゞ此の自己の本性
 即佛性なりと覺了して、此の佛性をして眞に佛性としての生活にあらしむればよいのである。然に何を
 以て此の外に佛を求め、神を求むるの必要あるか、又此の神の命するまゝに働くほかに何の神に頼み佛
 にたよるの必要あるか、吾人は速かに此の自己の本心を直觀して其の本心のまゝを佛心の働きとして一
 切を其の上にあらしむべきである。此の外に神を求め、此の外に佛を求むるならば、それは反つて眞佛を
 失つて魔佛を迎へ、眞神を外にして魔神に仕ふるものである。故に吾人は一切を放棄してたゞ自己の本
 佛に仕ゆるべし。自の外に佛なし、自己即ち佛なり。一切を自己の中に見るのである。然に世間の多く
 はともすれば此の眞實の自己を無視して此の外に佛を訪ね、反て自己の面目を失ふことは永劫に自己を
 滅ぼすものである。それに就ては自己を佛たらしむるものは結局は自分の外にない、若し諸佛來て之を
 佛たらしめとしても結局自ら佛たることを悟るものは自己以外にはあるべきものでない、而て佛とは即
 ち佛行の佛でなければならぬ、此の意味に於て自ら佛行を行せずして何の佛ぞや。と以上の如くどこま
 でも自己の成佛を主張し、自性本心の佛を直に表はさうとするのである。之に就て私は思ふ、凡そ眞

實の佛教は自覺覺他の他に佛教はない、して見れば覺他の第一歩は先づ自覺にある、一切の佛作佛行は
 自らの佛としての自覺から始まらねばならぬ。佛子の自覺は即ち此の自己の佛性の確認より始まるでは
 ないか、自分の他に佛を見やうとしても、それが眞佛であるや否やは自ら自己の佛性を見たことのない
 人には到底できることではない。従て一切の佛教は此の自己の佛性の自覺より始まる。之を見性と云ふ。
 此の見性の自己をして眞に佛たらしむるものは即ち此の佛子としての自己を失つては何ものもないこと
 になる、従つて凡そ社會の一切は此の佛性の開顯であり、生長であり、發展であるとすべきである。

(ロ) 他方の中の他力。然に此の佛性を如何にして開發せしむべきか、一口に即心成佛を云い、或は
 即身成佛を云ふとしても、其の佛性の活動果して充分に現はれてゐるであらうか、吾人はたゞ、佛性あ
 りとしても其の佛性が此の現實の生活の上に於て充分に發動していないとすればそれでは自ら佛子とし
 て充分の満足を得るものではない、而も此の世に於て自ら佛子など云ふもあるが吾人は何としても佛子
 の自覺がしないのをどうしたらよいのであるか、否吾人は佛子どころか寧ろ惡魔の手下となつてゐるこ
 との方が常である。自らなすべきことを爲さなければかりでなく、常に爲すべからざることをのみ爲し
 つゝあるを如何にすべきか。自ら向上の心が無いではないがその心さへともすれば明滅の間にあつて、
 甚だ以て自らが自らに信賴することさへできないのを實感する。諸行は無常にて何一つとして此の世
 に信賴することのできるものはない、又何一つ自らに自信を持ちうべきものもない。自ら眞を認めて眞
 を得ず、善美を求めて反て醜惡の行爲をやる。而も此の世を無常と聞いても無常の心も起らず、無我を
 教へられても無我のつもりにも更らになれない。かうした意味に於て私共の生活が何一つとして思ふや
 うにならぬ時、自力聖道の法門で自ら解脱のできない人があると云ふことを誰が否定し得るものがある
 だらう。而もかうした時にも永劫に死たくな、よくなりたいと云ふことのみは僞らぬ本心の願いであ
 るとき、私共はこゝに自力門による所の自力修行の力つき、其のよるすべもないときに、さうした人々

の爲めにとてわざ／＼本願を建て、之を救済することに全心をこめられた所の佛のましますことを聞くとき、私共の心がかうした御佛の救いに任からうとすることは普通人間の情として決して在り得ないことではない。前者を以て自己の力で解脱をしようとするも、と見るならば、之を以て自己の力でない、他の人の力、即如來の御力如來の御他力によつて救はれやうとすることは必ずしも人情の常として之を悪しざまに云ふべきことではない。水一つ飲むにも自分で飲むと思つていたものが水なくしても水が飲めるかと反省し來るとき水の水のちかけ、即ち自己の力以外の他力を認めずして居られやうか、大空に輝く太陽の一にも今までは自分の力で太陽を見、自分の力で太陽の光りにも浴してゐると思つていたものが、太陽なくしても自分の力で太陽を見、太陽の光に浴することができたらうかと反省して來るとき、そこに自分の力以外の太陽の力、太陽の恵みなくして之を見、之に浴することができたらうか、かく自分の周囲を眺め、自分そのもの、身心の内容を反省し來るとき、自分が思い、自分が考へると思つたことさへ、自分以外の關係を全々なくして果してそれが起されうるものであらうか、またときによれば自分では之を起すまい、起すまいとつとめてさへ、それが自分の力では如何にもすることのできないことの甚だ多いことを實驗するとき、そこに私共は私共以外のある大なる力の自己の上に働いてゐることを否定することができたらうか、いはゞ、此の世に於ける一切の現象に於て、自己の力で眞に爲し得ると思ふものが果してどれだけであるであらうか。靜に自己及び自己の周圍に於ける一切の社會現象を靜觀するに、自分を中心としての世界であるか、世界を中心としての自分であるか。自分を中心として見ゆるが如き一切の社會も、そこには無限に擴げられる宏大なる天地があり、幾億千萬年を経るとも判らぬ此の宇宙は更に尙幾千億萬年續くとも限らない此の世界に於て、自分の思ふまゝに此の宇宙がなるのであらうか、否よしそれがなるとするも、宇宙には無限の力と法則とが輝いてゐるではないか、さうして吾人が此の力と法則とに反しても尙この宇宙を自分のものとする事ができるのである

か、否寧ろそれよりも宇宙の絶大なる力と法則とは絶對に私共の自由を許さないではないかとさへ見える。従て若し私共に其の自己の自由を許すとすならば少くも此の宇宙の力と法則との許す範圍を超へることができぬではないかとさへ見られてならぬが是が此の宇宙現象界の有様である。而も又此の力と法則との中に輝く宇宙の活動は嚴然として一切萬法の上に君臨し、其の莊嚴にして美妙なる殆ど驚歎するばかりである。而も吾人の今日の生活は此の大自然の力の中に生き活かされてゐるではないか、而もそれが吾人の力と云ふ力としてどこに自らの力と云ふものがあるものであらう。之を如來の力と云ふならばそれこそ一切は如來の力による。如來の力を外にして萬法一として獨立なるものはあり得ない、一切は他によつてのみ存立し得るではないか、萬法の上に輝く宇宙の力、宇宙の一大生命こそは之として別に取立て、見ることのできるものではないか、乍然この絶大なる宇宙の力は此の絶大なる宇宙の法則と絶妙なる莊嚴の形に於て、一大宇宙に充ち満つて感ずることを得るのではないか。此の意味に於て吾人の今日は此の力に信頼し、此の法則に依憑して一切をその御力に打任せより外に仕方がない。即ち一切は自分以外の力による。従て自分そのものの力と云ふ力も亦此の如來の力を外にしてあり得ない力である。と此の意味に於ては已に如來の本願も已に一切が問題でないが、更に此の如來の御力が吾人の心に對して救済の御手として現はれて來る所に特に如來大悲の念佛の本願がある。乍然今はそれさへ已に如來の大悲より來るところの本願であつて、此の大悲によつて一切が救はれ、一切が働いて行くのであつて、他力の中の他力である。茲に於て他力信仰が多くの惱める人々の上に自ら現はれて來ると云ふことも亦自然の勢と云はねばならぬ。乍然こゝに最も注意を要すべきは一切を如來の他力であると仰ぐはよいがともすれば自ら未だ何等の煩惱を脱することもなくしてそのまゝ已に救いの中にあると仰て、安心して煩惱の満足に坐り込まうとする人のあることである。即ち如來の大悲をそのまゝに受けて之を喜ぶと云ふことを、安神して偽惡醜の生活に甘んじて喜んで居らうとする所の迷信に陥る人のある

ことである。一切を他力とするのはよい。乍然それだからとて、此の他力の中からも更に一層の向上の心に燃えて、如來の淨土に一刻も早く靈化せられやうとする躍進の心の起るのを自力門なりとして捨つべきであらうか。腹が減つて力かないので仕事ができぬからとて一切を人任せにして自分はそれで遊んでゐてよいのであらうか、又それで遊んでゐられるであらうか。吾人は若し出来るなら、其の腹の減つて苦いので此の苦しみを免かれる爲めに甘い御飯を頂くと云ふことを忘れてはならない。そしてまた腹が御飯によつて満されたなら、やがてはそれによつて働くことのできる力を得なければならぬ。お腹の飢に苦しみながらそのまゝがお救いだと思ふ。或はまたお腹を満して喜んで遊んでゐることが本心の満足であらうか。そこに吾人は絶對他力教の欠陥が見えてゐるではないかと思ふ。吾人はそこに如來の大悲を仰いでお腹の飢を満さねば喜べぬ所のものがある。そして又そのお腹の満されると共に自分の力の應分に現はれて來るのを覺え。而も其の力を以つて自己の爲すべき本心のまゝを働かずには居られないあるものがあるではないか。即ちそこに絶對他力の如來の慈光の中に入りひたり乍ら其の中から止むに止まれない、慈光の恵みに育まれて其の日の其の日の應分の自己の力が如來の御力に相應して社會生活の上に顯現して來なければならぬものがあるのを見る。

然ば如何にしてかゝる眞生の世界に吾人は生きることができらうか。即ちそこに吾人の云はうとする所の、如來の本願あり、念佛があるのである。

(一五、一一、五)

傳 十道觀

十一月六日よ	越後柏崎	十一月十四日	大阪 豊田氏方	十一月廿一日	名古屋崇徳寺
リ十日まで	見附町	同 十五日	神戸 藤村氏方	同 二十二日	岡崎市 近藤氏方
同 九日	四日市	同 十六日	同 尼崎市 圓平寺	同 二十二日	焼津 光心寺
同 十一日	伊勢大石	同 十七日	同 大阪市民館	同 二十四日	静岡
同 十二日	津市 阿部氏方	同 十八日	同 神戸	同 二十五日	清水
同 十三日		同 十九日	同 彦根高商	同 二十六日	歸京

偶 感 一 二

土 屋 觀 道

一、信仰に入るの道

信仰に入るの道は自己が眞實の生活に生きたいと思ふ心から起るのだと思ひます。自己の本心の満足をとこまでも眞剣にたどつて行けば必ずそこに入信の道が開いて來るものです。法藏菩薩が此願若し成せずんば正覺を取らずとの誓いこそ、やがては私共の志願を満足せしむるの第一歩でありませう。求むるところなきものに與へらるゝところがある理はない。否よし之を他より與へやうといたしても恐らくは之を得ることはできいでありませう。されば眞に道を求め信仰に入らうと思ふ人は先づ其の人に入信の態度として眞實の生活に生きたいとの念願が第一に必要であります。

二、心行不二

こゝに心行不二と云ふは安心と起行とは二でないといふことであります。安心とは其の目的を達

する爲めの心のもちかたであります。そして起行とは其の目的を達する爲めの方法の實行であるのであります。それについて、安心に總安心と別安心とがありすが總安心とは總して自分が偽惡醜の生活を厭い、如來嚴淨の世界に到らんことを求むる心であります。言かへれば自己の現在生活に於て自己の本心に反する生活を厭ふて之を離れ更に眞美美聖の涅槃淨樂の報土に到らんと願ふ心であります。次 別安心とは此の總安心の決定した人即ち眞に向上の佛土を願ふ人に於ては此の安心の決定と共に更に其の目的地に到達せんとする實行の方法であります。而して此の方法の實行についての心の据わがたが即ちこゝに云ふ別安心と云はれるものであります。此の安心が口に聲となつて現はれるのが南無阿彌陀佛の稱名であるのであります。故に稱名にはまさしく此の安心がなく

てはならぬことになりす。若し此の安心がないほどの稱名ならばそれは心なき人の徒なる口だけの稱名であつて、精神のこもらない念佛となるのであります。だから古來念佛には此の安心がなくてはならぬと云はるゝ理 あります。従てまた安

心の決まらない人には眞の念佛は口から出ぬこととなり。眞に心から如來の本願を信するものは自づから彌陀を信じ、念佛を信することゝなるからして、如來に歸命する心となり、此の歸命の相が聲となつて往生を願ふ念佛となるのであります。

吾が朋友たより

御葉書拜見いたしました粟生様からも今御ハガキで中止してもよいと申て來ましたから御隨意に願ひます。静岡も火の消えた様になつて居りますか長い間の鬱積は今に芽を出すことせう。どうか粟生様などによつてさうなられるやうに祈つて止みませぬ。清水も消長起伏常ならざる有様で遺憾に堪へませんが、之も皆私の反影に過ぎないので恥かしく思ひます。然し乍ら從

來のやうな特殊的でなく近來社會面との接觸が段々深く廣くなりつゝ行くことを思ふと今のかうした状態も伸び行く前提であらふことが痛切に思はれてなりません。すべては如來様の御ひねが現はれる姿で大虚空を抱含する大慈光をなつかしむ心に充たされます。神聖にして正しき我等の父よ。ハレルヤ ハレルヤ

南無阿彌陀佛 奥様いつも御留守居で中々の御事と存じ上候御上人様には引續き大阪方面に御活動下さる由承り陰ながら誠に尊きの極みと仰ぎ居り候。先般は意外に長々と御滞留を御願ひし御熱烈に御教化を頂き身の仕合せ只々合掌御念佛するのみに候。教を頂きても頂きても至心に御念佛知かき如何に罪業の深き身かとつくづく情けなく泣くなく御念佛を勵み居り候。家内もおばさんも共々相語り合ひ念じ合ふて精進致し居り候

十月十九日
清水市實相寺 中村辨康

今秋中には是非今一度御繰合せ御來越下されて私一家の者の此の仕方なき心にどうぞ恵みと力とを與へ下され度伏して御願申上候

越後柏崎町 會田 証
同 イト

越後見附町

眞生堂別時念佛三昧會報告
今井善吉

南無阿彌陀佛

故來見附町は宗教界の最も振はざる土地であります私が物心附いてから二年前に眞宗の佛教講話が一回有りました丈であります其時もたしか講師が、如來の本願と云ふ題でくしくしく解つた様な解らぬ様な御話をされました聴衆が一人去り二人去り

して講演が終る頃は居残た聴衆二三人と云ふ大失敗を演じてから見附町は宗教的に全々度し難き土地として顧みられず此種の講演會は催す人が無くなりました。然るに私も深く信仰の道に入れさして頂いてから此喜び此力強さを一般に別たすには居れなくなりまして先に土屋上人の柏崎町に御出の際見附町にも御出でを願ひまして第一回の御講演を願ひしたところ心配したにも係らず豫想以上の成績を擧げる事が出来ました其翌日御上人を新田公園に御案内致しました同公園は天然 風景に程よく人工を加えた眺望の良いゆつたりとした氣分の風光絶佳な所でありました。公園内の樹木うつそうたる

平地に一棟の離家がありして、其處で暫く休みました時こんな静な所で御別時をやつたら……と御話が出ましたので私は前述の様な宗教界の理解無き土地でしかも相談する道友一人も無いのですから多少不安とは思ひましたけれども此處に深く決心致しましたのが今回の御別時の發端であります。

先づ公園の管理人の處へ再三出向いて漸く承諾して頂き食事一切は同所で御世話願ふ事に致しまして、左記の方法で御案内申上りました。

日時 拾月二日より六日迄五日間

場所 見附町新出公園内
借樂園 (眞生堂)

「御別時中に我々が同所を眞

生堂と名附けました」
導師 中野善英様
御集りの方は

導師の中野善英様
原 哲 郎様
原 トミ様
小林 イシ様
會田 トイ様
渡邊 トセ様
池田 良吉様
米山 義興様
今井 善吉

以上九名の集りで有ります
少人数で有りませけれどな
も熱烈なる御方で二日の午前拾
時からゆつたりした気分でも
しつくりと熱心に勤めさして頂
きました。日中は御念佛と法話
夜分は女學校で二日より四日ま
で信仰連續講話及座談會と云ふ

事に致しました。

當地には長願寺柳原様と云ふ御
方が熱心に過去拾貳年の歴史を
持つ求道會と云ふ眞宗の御經を
教へる會を御世話しておられま
す。私も最近同會に入會させて
頂き共に力を合せて頂く事に致
しました。連續講話は求道會
主催と云ふ事に願しました。今迄
誰しもが駄目だと評して居りま
した當地で多數の而も熱烈なる
衆聽の三日間續けて詣寄て熱心
に聴て下さつたのには何より喜
しく感じました日中の御念佛も
康澤では味、得ぬゆつたりした
眞劍な気分は永久に忘れ難き一
つで有りました。

で多大の好果を得ました。
私一人でこれ丈の大仕事が出来
たとは如何しても思はれませ
ん。ひとへに如來の深き御慈悲
と感涙にむせんで居ります。
終りに臨みまして導師の熱烈な
る御指導と宿の方の御好意を心
から感謝して止まない次第であ
ります。
又拾壹月に土屋上人の御出でを
願はれるを思い斯く一步／＼と
眞生運動の爲に幾分づつでも盡
くさして頂く事を限り無く喜ん
で居ります今回池田米山兩君の
熱烈なる道友の出来ました事も
喜びに堪えない次第であります。

南無阿彌陀佛 合掌

供 養 行

◇ 私たちは本當に人の爲めに——と思てやつてる事は一つもありません。みな自分の爲めを先きへ立て、居ります。

◇ 然し自分の爲めを、先へ立てなくとも、自分のためになつて居らぬ事は一つもありませぬ、自分のためになつて居らぬやうなことなら人のためにもなつて居りませぬ。廣く深く考へるとき皆人のためにもなつて居り自分のためになつて居ります。

◇ 一本の蠟燭に火を點けると、先づ自分を照し他を照します。他を照し乍ら自分を照し出してゐます。だから本當に自分のため、自分を生かすがためにやつてゐることなら必ず他へもの爲めであり、救ひとなつてゐます。

◇ 給持さんが一杯のお茶を酌み、重役が一枚の書類を處理するのも、誰のために——といふやうな小さい問題でなく、一本の蠟燭が自己をも含めて萬力を照してゐるやうに、一切を照し、一切を救てゐる大菩薩行であります。

◇ 私達が何の爲めにやつてゐる、何のためになつた——と考へてゐる分量は、その爲めになつてゐる全功德の一小部分で、實は考へ盡すことの出来ぬ大功德となつて、其儘廻向せられてゐます、思量、計度けだくに上つた丈の効果を以て全功果だと思ふのは、井戸の蛙が眺めらるゝ丈の天地を以て全天地だと思つてゐるのと一つです。

◇ 本當に不思議、不可思議量、無功德絶大の大功徳量に没入したとき、大小損益を氣にせずして、自ら盡せるだけを盡し、享けられるだけを受けて、自他を等しく全してゆけます。だから粗末に費ひ、粗末に享けてゐます。眞に自他、一物一切を生かすが爲めに大供養行に徹する時、初めて經濟の根本義に甦ることが出来ます。(尅子)

◎ 風 揚 げ

◆ いかちは風揚げの季になります。

◆ 風を揚げるのに、揚りの敏い、勢の強い風ぼと長い尾をつけます、太い重い繩を尻尾につけると、却て風には上りが良いと云ふのは一寸考へられぬことです。繩の重みを利用して反てよく上るのです。

◆ 私たちにも常に下へ引き落さうとする一つの力と、上へ吹き揚げやうとする他の力とが加はつてゐます。

◆ それをいつも引き落さうとする力だけに捲き込まれて、逆に

これを活用する事を知らず、加之押しやうとして下さる力までを獲損なつて、始終大地へ頭をぶつ突けてゐます。

◆ 引き落さうとする力——一切の不幸失敗も重い尻繩がついて居る時程勇しい、大い邪魔が入つてゐる時ほど一層無礙精進の方が迷てゐるのが信仰でせう。

◆ 常に總てを善縁として吹かれる程上り、曳かれる程進む。對境に善惡好惡を造つて居らずに、境に順應して常にこれを消化し吾が向上として行けるが信でせう。(尅)

定価一部十錢 半年六十錢 一年一圓
振替口座東京四七二八八番 眞生社

東京市芝區芝公園第十四號地九番
編輯兼 土屋 觀道
發行人

東京市芝區愛宕下町四丁目北一番地
印刷人 金 鎮 玉

東京市芝區愛宕下町四丁目北一番地
印刷所 金山印刷所

發行所 眞生社

(大正十四年八月十三日)
第三種郵便物認可

大正十五年十一月十一日印刷納本
大正十五年十一月十二日發行

(毎月一回十二日發行) 第五卷第九號

NETHERLANDS